

2020 年度卒業論文

Andrea Palladio 建築四書の Villa における  
Order と Pediment の比例に関する研究

-ヴェネツィアの貴族とテルラフェーマの紳士の Villa の比較分析-

指導教員

坂牛卓

東京理科大学工学部第二部建築学科

坂牛研究室

5115037 田名網さなえ



## Abstract

### **STUDY ON PROPORTION ORDER AND PEDIMENT IN VILLA OF "I QUATTRO LIBRI DELL'ARCHITETTURA" OF ANDREA PALLADIO**

Comparative analysis of Venetian nobles and Terraferma gentlemen villa

5115037

Sanae TANAAMI

I analyzed the relationship between Orders and Pediments of Villa contained in Chapter 14 and 15 of The Andrea Palladio's "I quattro libri dell'architettura" from the stand point of following 3 views.

1. Comparison of the proportion of the Palladio's idea and the proportions used in his design.
2. Comparison of the proportions in Chapter 14 and 15 depending on the date of the completion.
3. Comparison of the proportion of the pediments.

As a result, there is a difference of the variation of the combination of the Order and Pediment depending on The aristocratic villa in Chapter 14 and The gentlemen's villa in Chapter 15. I thought that the Order and Pediment have the proportional relationship and that dimensional beauty was taken into consideration.



## 目次

---

梗概	・・・P. 7～P. 10
<hr/>	
第一章 序	・・・P. 11～P. 16
1. 1. 研究の背景と目的	
1. 1. 既往研究と本研究の意義	
第二章 研究対象	・・・P. 17～P. 18
2. 研究対象	
第三章 研究方法	・・・P. 19～P. 24
3. 研究方法	
3. 1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析	
3. 2. 14 章・15 章の設計年代ごとの比較分析	
3. 3. Pediment の比率の比較分析	
第四章 分析結果	・・・P. 25～P. 36
4. 1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析	
4. 2. 14 章・15 章の設計年代ごとの比較分析	
4. 3. Pediment の比率の比較分析	
第五章 考察	・・・P. 37～P. 38
5. 考察	
第六章 結論	・・・P. 39～P. 41
6. 1. 結論	
6. 2. 今後の課題	
<hr/>	
参考文献	・・・P. 42
謝辞	・・・P. 43～P. 44
資料編	・・・P. 45～P. 50

## 梗概

---

# Andrea Palladio 建築四書の Villa における Order と Pediment の比例に関する研究 -ヴェネツィアの貴族とテルラフェーマの紳士の Villa の比較分析-

坂牛卓研究室

5115037 田名網 さなえ

## 1. 研究の目的と背景

Andrea Palladio(1508~1580)は、イタリア・ルネサンスを代表する建築家で、その後の建築史において大きな影響を与えたとされる人物である。

彼の著書である『建築四書』における建築理論は、Marcus Vitruvius Pollio(B. C. 90 頃~20 頃)の『建築書』における理論に準拠したものであると言われている。<sup>註 1)</sup>

Palladio は平面図と立面図のあらゆる部分について、Vitruvius と同様に、有用さ又は便利さ、耐久力、美しさの 3 つが必要であるとしている。この中の美しさについて Vitruvius は、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が Symmetria の理論をもっている場合に保たれるとしている。<sup>註 2)</sup> 一方で『建築四書』には考古学<sup>註 3)</sup>

調査の影響も窺われる。Palladio は、イタリア国内の古代建築物の入念な実測調査と図面の復元を行っており、その経験を踏まえて、『建築四書』では、古代建築物の持つ比例関係と、Vitruvius の建築論や 16 世紀に主流であった建築方法の比較を行っている。したがって、Palladio の『建築四書』における理論は、Vitruvius に基づきながらも、Order に関しては自身による古代建造物の調査に基づいたものになっている。<sup>註 4)</sup>

また、通例として神殿と聖堂のみに用いられた Pediment を住宅や Villa<sup>註 5)</sup>の建築に適用したことは注目すべき点であり、後世の建築家に大きな影響を与え、Palladio 主義(Palladianism)の世界的流行を導いた最大の要因であるとされている。<sup>註 6)</sup>

そこで本研究では、Vitruvius に影響を受けながらも Palladio が自身の建築論として表現した Order と Pediment について、立面の比例に基づく分析を行い、その関係性及び規則性を明らかにする。

## 2. 研究対象

Palladio の研究者・桐敷真次郎の著書である『パラディオ「建築四書」注解』<sup>1)</sup>より、第二書・第 14 章「若干のヴェネチアの貴族方のヴィツァ建築の図面について」から 9 作品、第二書・第 15 章「テルラフェーマ(内陸部のヴィチェンツァ)の若干の紳士方のヴィツァ建築の図面について」から 12 作品、計 21 作品を対象とする。

なお、対象の選定にあたっては、まず、『建築四書』第二書が個人住宅について書かれたものであり、Palladio が「住宅こそ公共建築物にその根拠を与えた」と考え、「人間にとっての住宅の必要性和使用頻度から、

建築を論じるには個人住宅から始めるのが的を得ている」と述べていること<sup>註 7)</sup>から選定した。そして、第二書の中でも、特に第 14 章と第 15 章では、16 世紀に北イタリアにおいてめざましい発展が見られた Villa について書かれている点、Pediment が用いられている個人住宅という理由から研究対象とした。(表 1)

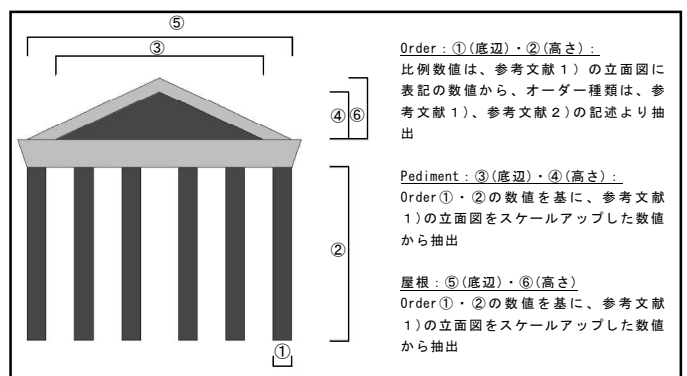
▼表 1 対象作品リスト

第 14 章 若干のヴェネチアの貴族方のヴィツァ建築の図面について						類型
第一書し番号-設計年度	図面名	設計年度	設計地	州名	県名	
14-①-41	ヴィツァ・ピサーニ	1541~1542	Veneto	Vicenza	Bagnolo di Lonigo	1
14-②-56	ヴィツァ・パドエール	1556	Veneto	Rovigo	Fratte Polesine	1
14-③-56	ヴィツァ・ヴェーネ	1556	Veneto	Treviso	Cassalto	5
14-④-59	ヴィツァ・フォースカリ	1559~1560	Veneto	Venezia	Gamberare di Mira	1
14-⑤-57	ヴィツァ・ヴァールパロ	1557~1558	Veneto	Treviso	Maser	4
14-⑥-52	ヴィツァ・ピサーニ	1552	Veneto	Padova	Montagnana	2
14-⑦-53	ヴィツァ・コルナロ	1553	Veneto	Padova	Piombino Dese	2
14-⑧-59	ヴィツァ・モチェニコ	1559~1562	Veneto	Venezia	Marocco	2
14-⑨-64	ヴィツァ・エーモ	1564	Veneto	Treviso	Fanzolo	1
第 15 章 テルラフェーマの若干の紳士方のヴィツァ建築の図面について						類型
第一書し番号-設計年度	図面名	設計年度	設計地	州名	県名	
15-①-45	ヴィツァ・サラチエーノ	1545	Veneto	Vicenza	Finale di Agugliaro	5
15-②-53	ヴィツァ・ラゴーナ	1553~1555	Veneto	Vicenza	Ghizzole di Montebelluna	3
15-③-48	ヴィツァ・ボヴェーナ	1548~1549	Veneto	Vicenza	Poisana Maggiore	5
15-④-63	ヴィツァ・ヴァルマナラ	1563~1564	Veneto	Vicenza	Lisiera	2
15-⑤-58	ヴィツァ・トリツシノ	1558~1562	Veneto	Vicenza	Melido	3
15-⑥-57	ヴィツァ・レベータ	1557~1558	Veneto	Vicenza	Campiglia di Berici	4
15-⑦-56	ヴィツァ・ティエーネ	1556	Veneto	Padova	Ciogenna	3
15-⑧-48	ヴィツァ・アンガラーノ	1548	Veneto	Vicenza	Anarano Bassano del Grappa	3
15-⑨-45	ヴィツァ・ティエーネ	1548~1546	Veneto	Vicenza	Quinto Vicentino	4
15-⑩-37	ヴィツァ・ゴディ	1537	Veneto	Vicenza	Lonedo di Lugo Vicentino	5
15-⑪-69	ヴィツァ・サレーゴ	1569	Veneto	Verona	Santa Sofia di Pedemonte	4
15-⑫-62	ヴィツァ・サレーゴ	1562	Veneto	Verona	Miega di Cologna Veneta	2

## 3. 研究方法

本研究は以下の方法により分析を行う。

『パラディオ「建築四書」注解』第二書・14 章と 15 章に掲載されている立面図をもとに、Order と Pediment を抽出した立面図を作成し、それを用いて(図 1)、① Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較、② 14 章・15 章の設計年代ごとの比例の比較、③ Pediment の比例の比較を行う。



▲図 1・抽出方法

### 3. 1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析

Palladio は Order の比例について、自らが考える数値をそれぞれ 1 : 7、1 : 7.5、1 : 9、1 : 9.5、1 : 10 としている。<sup>註 8)</sup> 実際の設計で用いられている比例と上記の比例の比較分析する。



慮してつくられるべき」と主張している。註9)そこで本分析では、14章の施主である貴族と15章の施主である紳士の社会的身分や経済力が異なることに着目し、章ごとの作品を比較することで比例関係を考察する。また Villa 建築が、貿易から農園経営へと、大きく方向転換をする歴史の転換期において発展をとげたことに着目し、時系列的な変化を見るために、掲載図面の設計年度である約30年間を5年ごとに区切り、年代ごとの比例関係を比較考察する。

### 3.3 .Pediment の比率の比較分析

Palladio は屋根勾配を 4.5 : 1(底辺 : 高さ)としており 4 : 1 では急すぎ、5 : 1 では平らすぎるとしている。註10)

そこで実際の設計では屋根勾配と Pediment に使用されている比例の関係の分析を行う。

## 4. 分析結果

### 4.1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析

Order の様式(Palladio の比例数値)と設計図面の比例の分布を(表2)に示す。Palladio は自らが考えた Order の比例に準じた数値、またはそれに近い数値で設計を行っていることがわかる。14章ではドリス式、イオニア式の Order が用いられ、15章では、14章では使用されていないコリント式、コンポジット式が用いられている。

▼表 2. Order の比例分布

14章	1:7.00~	1:7.50~	1:8.00~	1:8.50~	1:9.00~	1:9.50~	1:10.00
トスカナ式	1						0
ドリス式	1						3
イオニア式	1	1	2				5
コリント式	1				4		1
コンポジット式	1						0
角柱	—						0
合計	0	1	2	0	4	0	8

※14-③-56は除外

15章	1:7.00~	1:7.50~	1:8.00~	1:8.50~	1:9.00~	1:9.50~	1:10.00
トスカナ式	1						0
ドリス式	1			1			2
イオニア式	1	1			2		3
コリント式	1						1
コンポジット式	1						3
角柱	—						0
合計	0	1	0	1	2	0	9

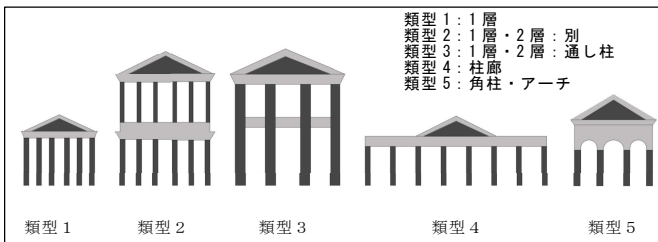
※15-①-45、15-②-48、15-③-37は除外

14章・15章	1:7.00~	1:7.50~	1:8.00~	1:8.50~	1:9.00~	1:9.50~	1:10.00
トスカナ式	1						0
ドリス式	1						5
イオニア式	1	2	2	1	6		8
コリント式	1						1
コンポジット式	1						3
角柱	—						0
合計	0	2	2	1	6	0	17

※14-③-56、15-①-45、15-②-48、15-③-37は除外

### 4.2. 14章・15章の設計年代による比較分析

分類1~5(図2)までの設計年代の分布を(表3)に示す。類型1は14章の1550年代に、類型2も14章では1550年代に用いられるが、15章では1560年代になってから用いられるようになる。類型3は14章には見られないが、1550年代後半から1560年代の15章では用いられている。類型5は初期1540年代に15章で多く見られる。



▼表 3. 類型1~5と14章・15章の設計年代の分布

	~1540	1541~1545	1546~1550	1551~1555	1556~1560	1561~1565	1566~
14章							
類型1		1			2	1	4
類型2				2	1		3
類型3					1		0
類型4					1		1
類型5					1		1
合計	0	1	0	2	5	1	9
15章							
類型1						2	0
類型2							2
類型3			1	1	2		4
類型4		1			1		1
類型5	1	1	1				3
合計	1	2	2	1	3	2	12
14章・15章							
類型1		1			2	1	4
類型2					2	2	5
類型3			1	1	2		4
類型4		1			2		4
類型5	1	1	1		1		4
合計	1	3	2	3	8	3	21

### 4.3. Pediment の比率の比較分析

Pediment と屋根の比例分布を(表4・5)に示す。14章では4:1以下のものが若干見られるが、Pediment の比例は4:1から5:1の間に集中分布している。また屋根はPediment より平均≒0.65° 角度が高い傾向にある。14章では15章より平均≒1.5° Pediment の角度が高く、屋根は平均2.5° 程度角度が高い傾向にある。

▼表 4. 類型1~5と Pediment の比例分布

14章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~
類型1		2	1			4
類型2		2	1			3
類型3				1		0
類型4					1	1
類型5		1	3	0	0	9
合計	0	7	4	1	1	17

※14-③-37、15-③-69除外

15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~
類型1			1	1		0
類型2			2	1		2
類型3			1	2		4
類型4			2	1		2
類型5		0	1	4	2	6
合計	0	0	7	10	2	14

※15-③-37、15-③-69除外

▼表 5. 類型1~5と 屋根の比例分布

14章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~
類型1		2	1			4
類型2		2	1			3
類型3				1		0
類型4					1	1
類型5		1	3	0	0	9
合計	0	7	4	1	1	17

※14-③-37、15-③-69除外

15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~
類型1			1	1		0
類型2			2	1		2
類型3			1	2		4
類型4			2	1		2
類型5		0	1	4	2	6
合計	0	0	7	10	2	14

※15-③-37、15-③-69除外

## 5. 結論および考察

Order、Pediment とともに『建築四書』で Palladio が考える比例に沿った数値を用いて設計を行っているが、14章と15章の比較では、4.1. Order 比例分布からは使用 Order の違いが、4.2. 類型1~5と14章・15章の設計年代の分布からは章ごとの設計傾向の違いが、4.3. 類型1~5とPediment と屋根の比例の分布においても違いが見られ14章と15章で取り扱った図面に対する設計傾向の違いがあることがわかる。

以上より、14章の貴族の Villa と15章の紳士方の Villa では、Order と Pediment の組合せのヴァリエーションに違いが見られる。しかし、双方ともに Order と Pediment の関係性は比例関係にあり、寸法的な美しさが考慮されていると考えられる。

### 脚注

- 註1) 参考文献1) P. 29、P. 36 註2) 参考文献2) P. 15※「Symmetria: 量的秩序に基づく格に適った構成」とは個々の部分から全体の姿にいたるまで一定の部分に照応することである。参考文献2) P. 1  
 註3) 建築における考古学の手法は、16世紀前半に Pirro Ligorio(1500~1583)が創始したとされている。参考文献1) P. 33 註4) 参考文献1) P. 59 註5) Villa とは町屋敷に対しての田舎屋敷、主屋敷のこと。フィレンツェ・ローマの Villa は別荘にあたり区別している。参考文献1) P. 189  
 6) 参考文献1) P. 482 註7) 参考文献1) P. 32 註8) 参考文献1) P. 58 註9) 参考文献1) P. 192 註10) 参考文献1) P. 138

### 参考文献

- 1) パラディオ「建築四書」注解：桐敷真次郎 訳注 中央公論美術出版 昭和61年1月20日発行
- 2) アンドレア・パラディオの建築と図面解説：桐敷真次郎 本の友社 1998年5月25日発行
- 3) ウィトルーウィウス建築書：森田慶一 訳注 東海大学出版部 2017年11月20日発行
- 4) パラディオの時代のヴェネツィア：渡辺真弓 中央公論美術出版 平成21年12月25日発行



# 第一章 序

---

## 1.1. 研究の背景と目的

## 1. 1. 研究の背景と目的

---

Andrea Palladio(1508～1580)は、イタリア・ルネサンスを代表する建築家であり、その後の建築史において大きな影響を与えたとされる人物である。

北イタリアのパドヴァに生まれ、13歳から石工職人として経験を積む中で、移住先のヴィチェンツァで22歳の時に maestro(親方)となり、教会関係の仕事に参加する。

1533年には建築工事にも関係するようになる中で、Palladio にとって重要な人物である Giangiorgio Trissino(1478～1550)との出会いがある。Trissino は、高尚な知識人が多かったとされるヴィチェンツァにおいて、第一の知識人、またアマチュアの建築家であり、Palladio は『建築四書』<sup>1)・12)</sup>の中で、その人物像とヴィチェンツァという町について次のように述べている。

「大きな市城をもつ都市ではないが、ひじょうに高尚な知識人に満ちており、富にも十分恵まれている。また、この町は、私が、いま一般のように役立つように公表しようとしている事柄を、実施してみる機会をはじめ得させてくれた町であり、きわめて多数の美しい建物が見られ、また、この技芸を熱心に研究する多くの紳士がおられた。これらの方々は、その高貴さや学識により、最も輝かしい人物に数えられてよい。たとえば、われらの時代の光輝である、Giangiorgio Trissino 殿・・・・・・」<sup>註1)</sup>

その Trissino 自らの手により古典の教育が授けられ、Palladio が 33 歳～41 歳にあたる、1541 年・1545 年～46 年・1546 年～47 年・1549 年の 4 回、イタリア国内の古代建築物の調査旅行に同行している。

Palladio は、Trissino との調査旅行において、すべての古代建築が道理と美しい比例をもつことに着目して、入念な実測調査と図面の復元を行っており、Palladio の建築家としての基礎、『建築四書』へ取り組むきっかけになったと考えられている。<sup>註2)</sup>

また、この出会いによってヴィチェンツァの貴族からの建築の設計依頼が寄せられるようになる。さらに、「バシリカ」の設計者に選ばれたことも Palladio が建築家の地位を確立する上で重要な出来事であった。ヴィチェンツァは、Palladio がこの町で機会を得て、市の内外に多数の建物を残したので、「Palladio の町：Citta del Palladio」とも呼ばれている。<sup>註3)</sup>

その『建築四書』における建築理論は、わが師にしてわが案内者と定める、Marcus Vitruvius Pollio(B. C. 90 頃～20 頃)の『建築書』<sup>2)</sup>における理論に準拠したものであると言われている。

Palladio は平面図と立面図のあらゆる部分について、Vitruvius と同様に、有用さ又は便利さ、耐久力、美しさの3つが必要であるとしているが、<sup>註4)</sup> この中の美しさについて Vitruvius は、次のように述べている。

「美の理は、建物の外観が好ましく優雅であり、かつ肢体の寸法関係が正しい Symmetria の理論をもっている場合に保たれるであろう。」<sup>註5)</sup>

Symmetria とは、Vitruvius が『建築書』の中で、建築を成立させる6つの基本概念のひとつとして、次のように記している。

「①Ordinatio(量的秩序)：作品の肢体が個々別に度に適っていること。全体医的比例を、Symmetria(④で後述)に整えること。②Dispositio(質的秩序一般に関する原理)：ものをびったりと配置すること。その組み合わせによって作品を質を以て立派に作り上げること。③Eurythmia(質的秩序に基づく美的構成)：美しい外観。肢体の組み立てにおいて度に適って見えること。

④Symmetria(量的秩序に基づく格に適った構成)：個々の部分から全体の姿に至るまでが、一定の部分に照応すること。人体の肱、足、掌、指、その他部分が一定の部分に照応するように、建物の造成もその通りである。⑤Décor(形式と内容の一致制)：建物が是認された事項によって権威をもって構成され、欠点なく見えること。⑥Distributio(配分・経理を内容する実践的原理)：材料や場所を工合よく配分することであり、工事の際の費用を計算によって細かく割り振ること。」<sup>註6)</sup>

また Vitruvius は、神殿の構成においての *symmetria* について次のように述べている。

「神殿の構成は *symmetria* から定まる。これはギリシア語でアナログア(類比・数学的比例)といわれる比例から得られる。比例とはあらゆる建物において肢体のおよび全体が一定部分の度に従うことで、これから *symmetria* の理法が生まれる。」<sup>註7)</sup>

さらに、Vitruvius は肢体について、自然は人間の身体を次のように構成すると説明している。

「①頭部顔面は顎から額の上生え際まで 1/10、②掌も手首から中指の先端まで 1/10、③頭は顎からいちばん上の頂まで 1/8、④首の付け根を含む胸のいちばん上から頭髪の生え際まで 1/6、⑤胸の中央からいちばん上の頭頂まで 1/4、⑥顔そのものの高さ、顎の下から鼻孔の下まで 1/3、鼻孔の下から両眉の中央まで 1/3、両眉の中央から頭髪の生え際まで 1/3、⑦足は背丈の 1/6、⑧腕は 1/4、⑨胸は 1/4、⑩その他の肢体もまた自分の計測比をもつ。

自然が人間の身体を、肢体がその総計である全体の姿に比例的に照応するよう構成したとすれば、昔の人たちは建物を作り上げるにあたって、一つ一つの肢体が全体の外観に対して通約的正確さを保つよう、十分な根拠をもって定めたのだと思われるとしていて、そこから、全ての建物に不可欠と考えられる計測の基を指、掌、足、腕のような人体の肢体から集め、それをギリシア人がトレイオンという完全数に配分して、⑩両手の指の数から見いだされる 10 と呼ばれる数を完全数、⑥それに反対の説をなす数学者達によって、人間の足は背丈の 1/6 であることから見出された 6 と呼ばれる完全数、また 10 と 6 の完全数の、両方を合わせて最も完全な数として 16 をつくっている。」<sup>註8)</sup>

そのことから、肢体から得られる数値により、建築の寸法が決められているとすれば、Palladio が設計に肢体からなる比例の影響を受けたのではないかと考えられる。

Trissino の没後のパトロンであった Daniela Barbaroka(1513~1570)の Vitruvius の注釈書で図解を作製しており、1554 年に 5 回目の調査旅行にも同行しており、ここにも Vitruvius の影響が考えられる。<sup>註9)</sup>

さらに、Vitruvius は建築家に必要な知識として、次の要素を記している。

「①文章の学、②描画の知識、③幾何学、④歴史、⑤哲学、⑥音楽、⑦医術、⑧法律の所論、⑨星学あるいは天空理論。」<sup>註10)</sup>

特に、③幾何学については、Symmetria の問題は幾何学の理論と方法によって明らかにされるとしている。また、⑥音楽と⑨星学あるいは天空理論の間には、三角形と四角形における星の協和と、四度および五度の音の協和に関しての共通の議論があるとしている。

協和について、Rudolf Wittkower(1901~1972)は、『ヒューマニズム建築の源流』<sup>3)</sup>の中で、次のように記している。

「Palladio は、自分が最も美しいと思う部屋の縦・横の比を与えている。

①円形、②正方形、③部屋の縦が正方形の対角線(正方形の対角線とその一辺との関係は、 $\sqrt{2}:1$ )、④正方形+その $1/3(3:4)$ 、⑤正方形+ $1/2(2:3)$ 、⑥正方形+その $2/3(3:5)$ 、⑦二つの正方形( $1:2$ )。」「<sup>註11)</sup>

また、高さ・縦・横・3つの数の比例については、次のように記している。

「① $2:3:4$ のように( $b-a=c-b$ )、② $4:6:9$ のように( $a:b=b:c$ )、③ $6:12:8$ のように( $b-a/a=c-b/c$ )と3つの例において、部屋の高さは2つの外項の等差中項、等比中項、調和中項を表しており、この3つのタイプの比例は、Pythagoras(B.C.582~496)によるとされ、これなくしては、いかなる比例の有理数理論も考えられない。そして協和音は比例中項によって決定される。」「<sup>註12)</sup>

Palladio は『建築四書』において、Vitruvius の考える美しい比例である、Symmetria や、音楽、天空理論の協和に基づきながらも、古代建築の調査結果を当時の一般的な建築方法と比較、かつ自身の守っている建築法則を示しており、その中で、Order に関しては自身が考える、「パラディオオーダー」と呼ばれる古代建造物の調査に基づいた独自の比例関係を示している。<sup>註13)</sup>

また、通例として神殿と聖堂のみに用いられた Pediment を住宅や Villa<sup>註\*)</sup>の建築に適用したことは注目すべき点であり、後世の建築家に大きな影響を与え、Palladio 主義(Palladianism)の世界的流行を導いた最大の要因であるとされている。<sup>註14)</sup>

そこで本研究では、Vitruvius に多くの影響を受けながらも、Palladio が自身の建築論として表現した Order と Villa 建築において採用した Pediment について、美しさが必要と述べている立面図の比例に基づく分析を行い、その関係性及び規則性を明らかにすることを目的とする。

## 1. 2. 既往研究と本研究の意義

---

既往研究として、特に桐敷による『パラーディオの設計法(1)～(5)』<sup>4)～8)</sup>をあげる。

パラーディオの設計法(1)は、パラッツォ・ポールト・フェスタの平面計画と正面デザインの三次元的比例についての論文である。Palladio が用いたとされる、「ヴィチェンツァ尺：ピエーデ(il vicentino)」を尺としてではなく、モジュールとして用いたと分析をしている。パラーディオの設計法(2)～(5)も、カリター修道院、ロトンダ、バシリカ、について、(1)と同様に図面の寸法についての分析をした論文である。

また、「ヴィチェンツァ尺：ピエーデ(il vicentino)」については、同じく桐敷が、『アンドレア・パラーディオのヴィチェンツァ尺について』<sup>9)</sup>、『ふたたびアンドレア・パラーディオのヴィチェンツァ尺について』<sup>10)</sup>の論文の中で、実長について分析をしている。

本研究では、個々の図面を分析して得られたヴィチェンツァ尺を、モジュールとして用いられている点に着目しながらも、対象を Order と Pediment に限定する点、対象作品を Villa の複数作品とすることで、既往研究とは異なる側面から研究する。





## 第二章 研究对象

---

### 2. 研究对象

## 2. 研究対象

---

Palladio の研究者・桐敷真次郎<sup>註15)</sup> の著書である『パラーディオ「建築四書」注解』<sup>11)</sup>より、第二書・第14章「若干のヴェネチアの貴族方の Villa 建築の図面について」から9作品、第二書・第15章「テルラフェーマ(内陸部のヴィチェンツァ)の若干の紳士方のヴィッラ建築の図面について」から12作品、計21作品を研究対象とする。

なお、対象の選定にあたっては、まず、『建築四書』第二書が個人住宅について書かれたものであり、Palladio が「住宅こそ公共建築物にその根拠を与えた」と考え、「人間にとっての住宅の必要性和使用頻度から、建築を論じるには個人住宅から始めるのが的を得ている」と述べていることから選定した。<sup>註16)</sup>

そして、第二書の中でも、特に第14章と第15章では、16世紀の北イタリアにおいてめざましい発展が見られた Villa について書かれている点、Pediment が用いられている個人住宅という理由から上記21作品を研究対象とした。表1に対象作品リストを示す。

また、Villa には二種の建物が要求されるものとしている。ひとつは主人公と家族の住居の建物、もうひとつは領地の収穫物および動物たちを管理し、保護するための建物である。お互いがそれぞれの妨げにならないように敷地の割付を行うことが求められている。<sup>註17)</sup>

さらに、ヴェネツィアにおける Villa の定義は、ローマ、フィレンツェにおける Villa Suburbana の別荘とは違い、Ia fabrica di Villa として区別している。<sup>註18)</sup>

## 第三章 研究方法

---

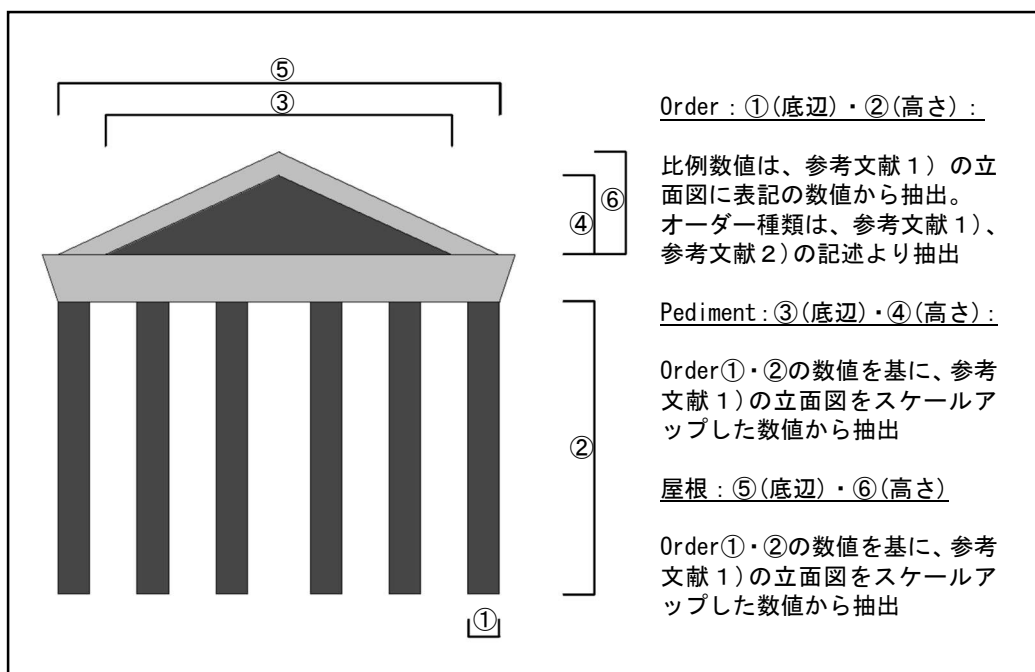
### 3. 研究方法

- 3.1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析
- 3.2. 14 章・15 章の設計年代ごとの比較分析
- 3.3. Pediment の比率の比較分析

### 3. 研究方法

本研究は以下の方法により分析を行う。

『パラーディオ「建築四書」注解』第二書・14章と15章に掲載されている立面図をもとに、Order と Pediment を抽出した立面図を作成し、それを用いて、①Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較、②14章・15章の設計年代ごとの比例の比較、③Pediment の比例の比較を行う。図1に抽出方法を示す。



▲図1・抽出方法

### 3.1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と 設計で用いた比例の比較分析

---

Palladio は Order の比例について、自らが考える数値を、トスカナ式が 1 : 7、ドリス式が 1 : 7.5、イオニア式が 1 : 9、コリント式が 1 : 9.5、コンポジット式が 1 : 10 としている。<sup>註19)</sup> この比例は「パラディオオーダー」と呼ばれるもので Palladio 独自の比例関係となっている。

ここでは、抽出した実際の設計で用いられている比例と上記比例の比較分析する。

14 章と 15 章に掲載されている立面図の Order 部分には、Palladio が用いた、ヴィチェンツァ尺 : ピエーデ (単位) による数値の表記がされている。このヴィチェンツァ尺については、桐敷が、1 ピエーデ = 0.3564m、その 1/12 の 1 オーンチア = 0.0297m、さらにその 1/4 の 1 ミヌート = 0.0074m と見解を示している。<sup>註20)</sup>

Palladio が用いたピエーデに対する解釈は諸説あり、結論づけられた数値はない。イタリアの研究者は様々な数値を掲示していること、欧米の研究者の多くは美術史家が多く、ヴィチェンツァ尺の解明自体はあまり重要視されなかったこと、イタリア・ルネッサンス期の尺度の概念は今より厳密でなく、建築四書の中でも若干のバラツキがあるためである。

日本では、「I Quattro Libri dell'Architettura di Andrea Palladio, Venetia, Domenico Franceschi, 1570; Reprint, Ulrico Hoepli, Milano, 1945, 1969」<sup>1)</sup>

初版本が、大阪工業大学中央図書館所蔵と金沢工業大学ライブラリーセンターにきわめて保存状態のよい美しいものが所蔵されており、桐敷は実際にこの 2 冊の実測を行って、大阪工業大学中央図書館所蔵⇒1 ピエーデ = 0.3500m、金沢工業大学ライブラリーセンター所蔵⇒1 ピエーデ = 0.3520m という数値を得ている。しかしこの長さは紙の収縮の影響を考慮すると、出版当時の実測は 5~6 mm 程度長かったと考えられている。<sup>註21)</sup>

その 14 章と 15 章の立面図面に表記されている数値から、実際の設計で用いられている屋根・Order の比例関係を抽出する。

また実際の設計に用いられている Order の、トスカナ式・ドリス式・イオニア式・コリント式・コンポジット式の判別は、『建築四書』の第二書、14 章・15 章中の文章と、『アンドレア・パラディオの建築と図面解説』の第二巻と第三巻の文中より抽出している。

## 3.2. 14章・15章の設計年代ごとの比較分析

---

PalladioはVillaについて、「住宅はその家族、および社会的背景を配慮してつくられるべき」と主張している。<sup>註22)</sup>そこで本分析では、14章の施主である貴族と15章の施主である紳士の社会的身分や経済力が異なることに着目し、章ごとの作品を比較することで比例関係を考察する。

14章の施主である貴族と15章の施主である紳士の社会的身分については、14章の施主の全てがヴェネツィアの貴族であり、主にヴェネツィア、ヴィチェンツァの総督、貴族軍人、行政長官、財務官や執行官である。また15章の施主については、ヴィチェンツァ、ベローナの貴族などで、公職などに就いている。

この社会的身分の明確な違いとして、『パラディオの時代のヴェネツィア』<sup>12)</sup>において、渡辺真弓(1948～)は次のように記している。

「中世には海洋国家として繁栄を誇り自足していたヴェネツィアは、14世紀末から本土側を制圧し始め、15世紀初頭頃までに広範な領土をもつようになった歴史をもつが、テッラ・フェルマとの関係はやや複雑である。1404年からヴェネツィアの支配下に入ったヴィチェンツァや、1405年からのパドヴァとヴェローナなどの共和国内の諸都市には、行政と司法を司る執行長官(podesta)、財政と軍事を司る首長(capitano)という二つの重要な役職がおかれたが、その地位に就けるのは共和国政府から派遣されたヴェネツィア貴族に限られていた。そのように統治されることを屈辱と感じる封建貴族たちがヴィチェンツァにはパドヴァに比べて多かったと言われている・・・」<sup>註23)</sup>

また、Palladioは、都市の個人住宅についても、次のように述べている。

「Vitruviusがその第一書および第六章でいっているように、重要人物、特に共和国の重要人物にとっては、ロτζアと、広々とした装飾のある住宅が要求され、そのような部屋で主人公に挨拶するため、あるいは、何らかの援助や恩恵を乞うために待っている人々を、気持ちよくもてなせるようにする。また、比較的身分の低い紳士方にとっては、建物はより小さく、より費用がかからず、装飾も少ない方が適している。」<sup>註24)</sup>

このことから14章と15章は意図をもって分類されていると考える。

ヴェネツィア貴族たちが、貿易から農園経営へと、大きく方向転換をする歴史の転換期において、Villaの建築が発展をとげたことに着目し、時系列的な変化を見るために、掲載図面の設計年度である約30年間で5年ごとに区切り、年代ごとの比例関係を比較考察する。

### 3.3. Pediment の比率の比較分析

---

Palladio は屋根勾配を 4.5 : 1(底辺 : 高さ)としており 4 : 1 では急すぎ、5:1 では平らすぎるとしている。  
註 19)

そこで実際の設計では屋根勾配と Pediment に使用されている比例の関係の分析を行う。

屋根と Pediment については、図面中に明確な数値表記がないため、『建築四書』をスキャンしたデータを illustrator に取り込み、200%に拡大した図面部分を A3 で出力、Order に表記されている数値を参照し、立面図をスケールアップしたおおよその数値から抽出している。

手書き図面のため、数値表記のある個所をスケールアップしてもバラつきが多く、また、立面図と平面図でもバラつきがみられるため、スケールアップした数値はおおよその数値とする。





## 第四章 分析結果

---

- 4.1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と設計で用いた比例の比較分析
- 4.2. 14 章・15 章の設計年代ごとの比較分析
- 4.3. Pediment の比率の比較分析

## 4.1. Palladio が『建築四書』で明記している各 Order の比例と 設計で用いた比例の比較分析

Order の様式と 14 章・15 章に掲載されている Order の寸法値、そこから計算した Order の比例の一覧を表 2 に示す。それを基にした、Order の様式(Palladio の比例数値)と設計図面の比例の分布を表 3 に示す。なお分布表で「パラディオオーダー」に該当する箇所にはグレーの着色、2 層構成については 1 層に用いられている Order を分布図に表している。

Palladio は自らが考えた Order の比例に準じた数値、トスカナ式が 1 : 7、ドリス式が 1 : 7.5、イオニア式が 1 : 9、コリント式が 1 : 9.5、コンポジット式が 1 : 10、またはそれに近い数値で設計を行っていることがわかる。14 章ではドリス式、イオニア式の Order のみが用いられている。15 章では、14 章では使用されていないコリント式、コンポジット式が用いられている。角柱に関しては 4 図面をデータから除外しているが、角柱の多くが 15 章で用いられている。

▼表 2. Order の比例一覧

図面番号 章-通し番号-設計年度	図面名	設計年度	Order				種類	類型
			底辺 : 高さ(図面数値・P)	底辺 : 高さ	本数	種類		
14-①-41	ヴィッラ・ピサーニ	1541~1542	2:16	1 : 8.00	6	ドリス	1	
15-⑨-45	ヴィッラ・ティエーネ	1545~1546	2.5 : 22	1 : 8.80	6	ドリス	4	
15-⑥-57	ヴィッラ・レペータ	1557~1558	2 : 15.5	1 : 7.75	4	ドリス	4	
14-⑨-64	ヴィッラ・エーモ	1564	2.5 : 20	1 : 8.00	4	ドリス	1	
14-②-56	ヴィッラ・パドエール	1556	2:20	1 : 10.00	6	イオニア	1	
14-⑤-57	ヴィッラ・ヴァールパロ	1557~1558	2.5 : 22.5	1 : 9.00	4	イオニア	4	
14-④-59	ヴィッラ・フォースカリ	1559~1560	2:18.5	1 : 9.25	6	イオニア	1	
15-⑪-69	ヴィッラ・サレーゴ	1569	2.5 : 25	1 : 10.00	8	イオニア	4	
14-⑥-52	ヴィッラ・ピサーニ	1552	2.25:17.5	1 : 7.78※1F	4	ドリス	2	
			1.8 : 16	1 : 8.88※2F	4	イオニア		
14-⑦-53	ヴィッラ・コルナーロ	1553	2:18	1 : 9.00※1F	6	イオニア	2	
			1.6:16	1 : 10.00※2F	6	コリント		
14-⑧-59	ヴィッラ・モチェニーゴ	1559~1562	2:18.5	1 : 9.25※1F	6	イオニア	2	
			1.6:15.5	1 : 9.68※2F	6	コリント		
15-⑫-62	ヴィッラ・サレーゴ	1562	2 : 18	1 : 9.00※1F	8	イオニア	2	
			1.6 : 15	1 : 7.50※2F	8	コリント		
15-④-63	ヴィッラ・ヴァルマナーラ	1563~1564	2 : 18	1 : 9.00※1F	6	イオニア	2	
			1.6 : 15	1 : 7.50※2F	6	コリント		
15-⑤-58	ヴィッラ・トリッシノ	1558~1562	2.5 : 25	1 : 10.00※通し柱	6	コリント	3	
15-⑧-48	ヴィッラ・アンガラーノ	1548	4 : 40	1 : 10.00※通し柱	4	コンポジット	3	
15-②-53	ヴィッラ・ラゴーナ	1553~1555	2.5 : 25	1 : 10.00※通し柱	4	コンポジット	3	
15-⑦-56	ヴィッラ・ティエーネ	1556	4 : 40	1 : 10.00※通し柱	4	コンポジット	3	
15-①-45	ヴィッラ・サラチェーノ	1545	* : ***	* : ***	*	角柱	5	
15-③-48	ヴィッラ・ボヤーナ	1548~1549	* : ***	* : ***	*	角柱	5	
15-⑩-37	ヴィッラ・ゴーディ	1537	* : ***	* : ***	*	角柱	5	
14-③-56	ヴィッラ・ツェーノ	1556	* : ***	* : ***	*	角柱	5	

▼表 3. Order の比例分布

14章		1: 7.00~	1: 7.50~	1: 8.00~	1: 8.50~	1: 9.00~	1: 9.50~	1: 10.00	
トスカナ式	1: 7.00								0
ドリス式	1: 7.50		1	2					3
イオニア式	1: 9.00					4		1	5
コリント式	1: 9.50								0
コンポジット式	1: 10.00								0
角柱	—								0
		0	1	2	0	4	0	1	8

※14-③-56は除外

15章		1: 7.00~	1: 7.50~	1: 8.00~	1: 8.50~	1: 9.00~	1: 9.50~	1: 10.00	
トスカナ式	1: 7.00								0
ドリス式	1: 7.50		1		1				2
イオニア式	1: 9.00					2		1	3
コリント式	1: 9.50							1	1
コンポジット式	1: 10.00							3	3
角柱	—								0
		0	1	0	1	2	0	5	9

※15-①-45、15-③-48、15-⑩-37は除外

14章・15章		1: 7.00~	1: 7.50~	1: 8.00~	1: 8.50~	1: 9.00~	1: 9.50~	1: 10.00	
トスカナ式	1: 7.00								0
ドリス式	1: 7.50		2	2	1				5
イオニア式	1: 9.00					6		2	8
コリント式	1: 9.50							1	1
コンポジット式	1: 10.00							3	3
角柱	—								0
		0	2	2	1	6	0	6	17

※14-③-56、15-①-45、15-③-48、15-⑩-37は除外

## 4.2. 14章・15章の設計年代ごとの比較分析

---

図形化したデータを図2~5に、類型を図6に、類型1~5までの設計年代の一覧を表4に、分布を表5に示す。

14章と15章の比較方法として、Orderと屋根・Pedimentの寸法数値を参照して図形化し、Orderと屋根・Pedimentの組み合わせを、類型1~5までに分類した。

図形化にあたっては、CADを使用し、1ピエーデでグリットを作り作成した。

類型1は一層の構成、類型2は二層の構成でOrderがそれぞれに配置されているもの、類型3は二層構成でOrderが通し柱のもの、類型3は柱廊に屋根・Pedimentが配置されているもの、類型5は角柱とアーチで構成されたものである。

類型1には4図面、類型2には5図面、類型3には4図面、類型4には4図面、類型5には4図面と分類することができる。

類型1ではドリス式とイオニア式のOrderが用いられ、類型2では1層目にコリント式、二層目にイオニア式が用いられたものが多い、類型3ではコンポジット式の4ものが多く、類型4ではドリス式、イオニア式が用いられている。

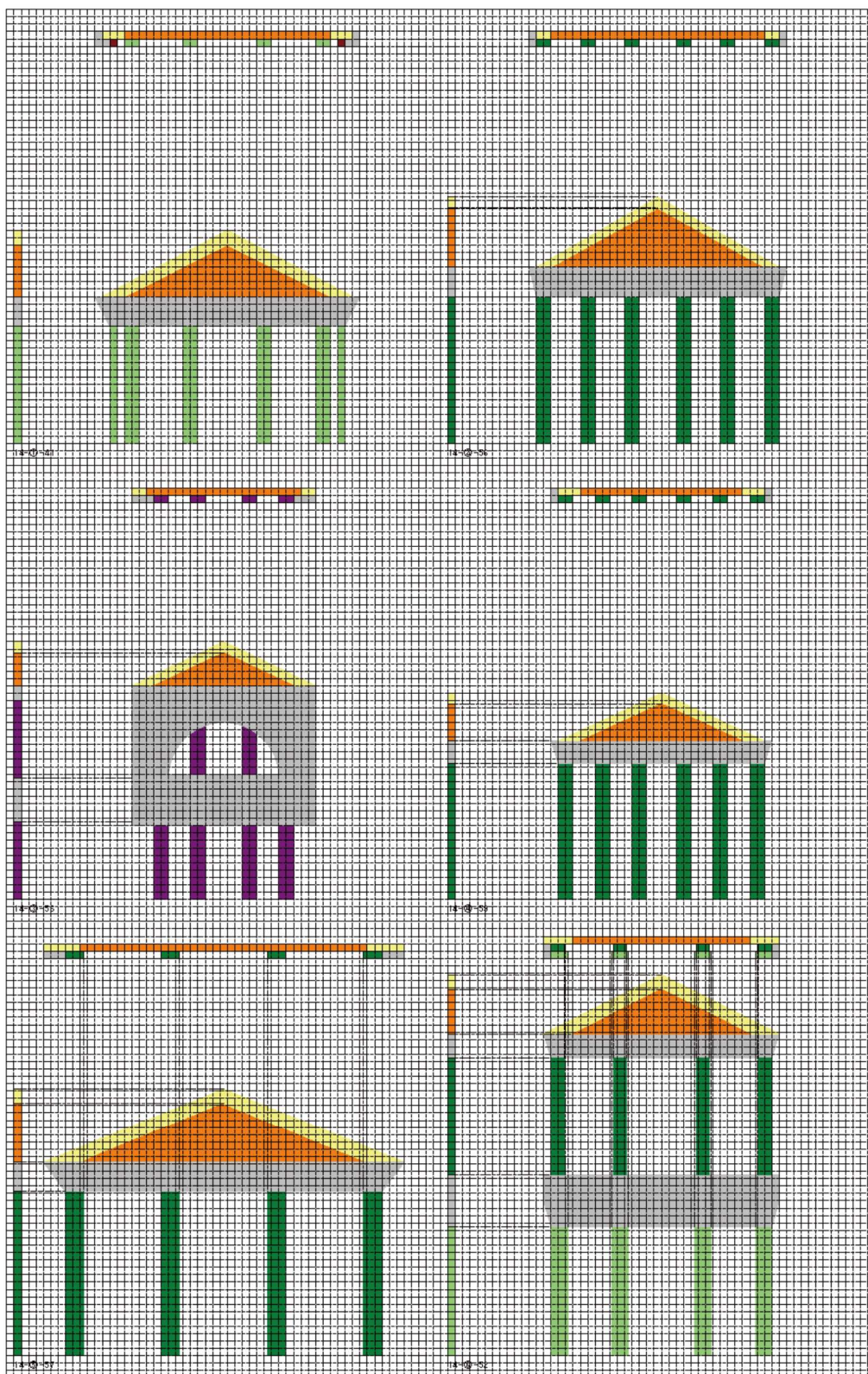
類型1は14章の1550年代に用いられるが、15章では全く用いられていない。類型2は14章の1550年代に用いられるが、15章では1560年代になってから用いられるようになる。類型3は14章には見られないが、1550年代後半から1560年代の15章では用いられている。類型4は15章の全ての年代で用いられている。類型5は初期1540年代に15章で多く用いられている。

全体として、14章では類型1と類型2の組み合わせが多く用いられており、15章では類型3、類型4、類型5が多く用いられていて、14章と15章を比較すると、用いられているOrderとPedimentの組み合わせに違いが見られる。

また設計年代では、15章ではどの時代も同様のペースで設計を行っているが、14章では1550年代以降の設計が多く、1541年~1549年にかけてPalladioは建築調査旅行をしており、14章においての設計は、この設計調査旅行後に行われるようになったことがわかる。

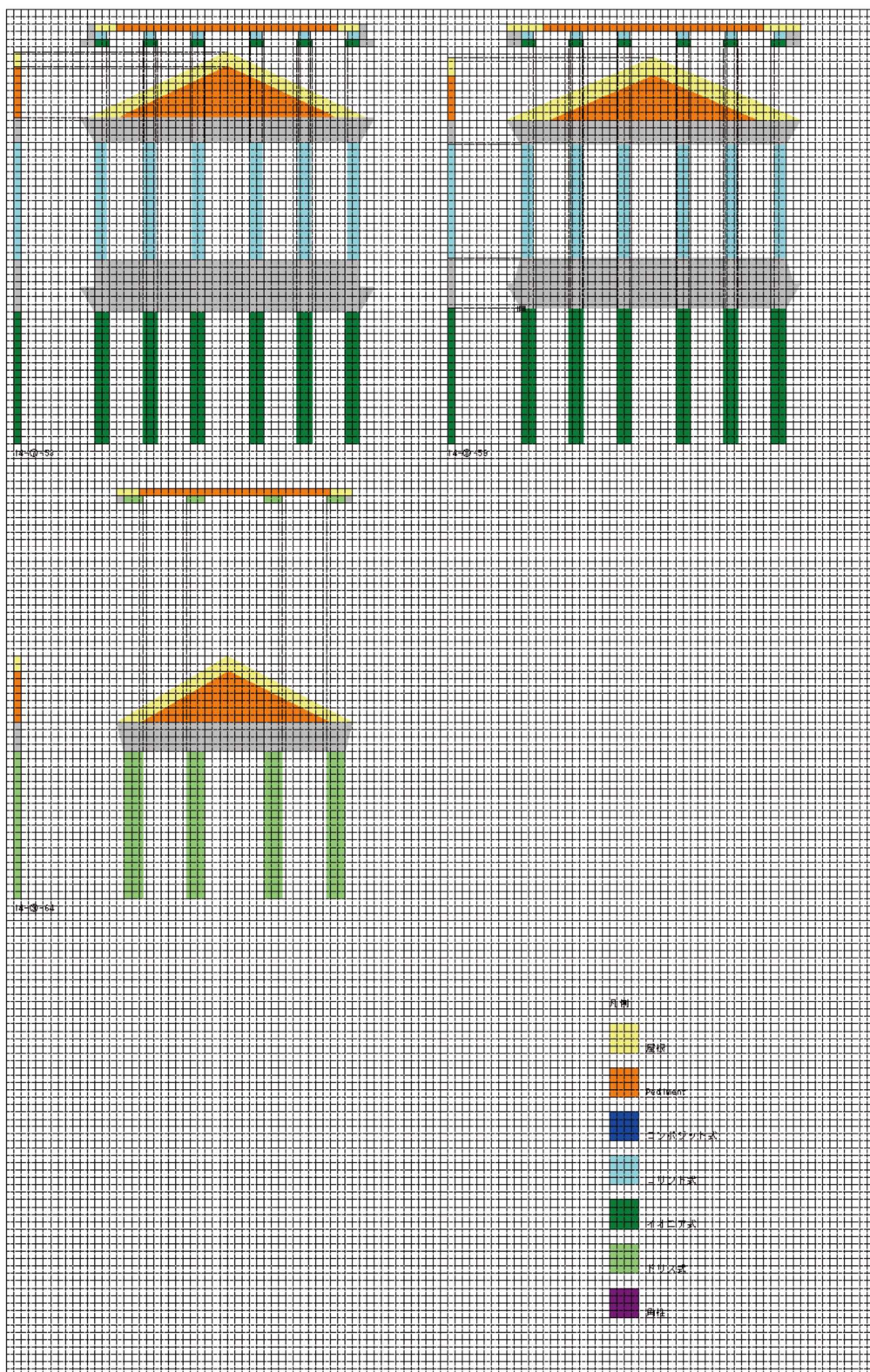
全体としては、1556年~1560年までにされた設計が多く、約4割がここに集中している。Palladioが48歳~52歳の時期である。

14-①-41	14-②-56
14-③-56	14-④-59
14-⑤-57	14-⑥-52



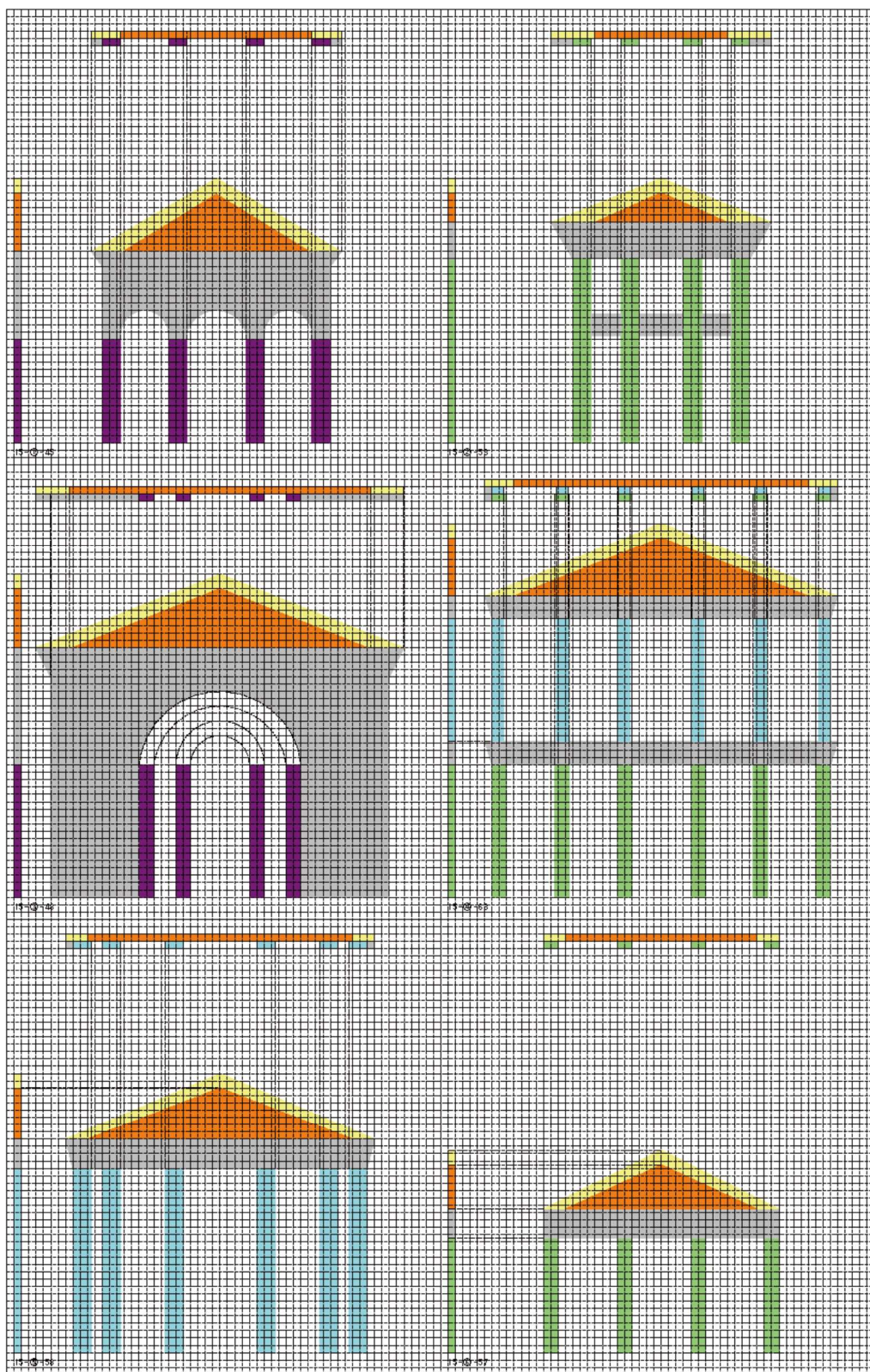
▲图 2 14 章①~⑥

14-⑦-53	14-⑧-59
14-⑨-64	



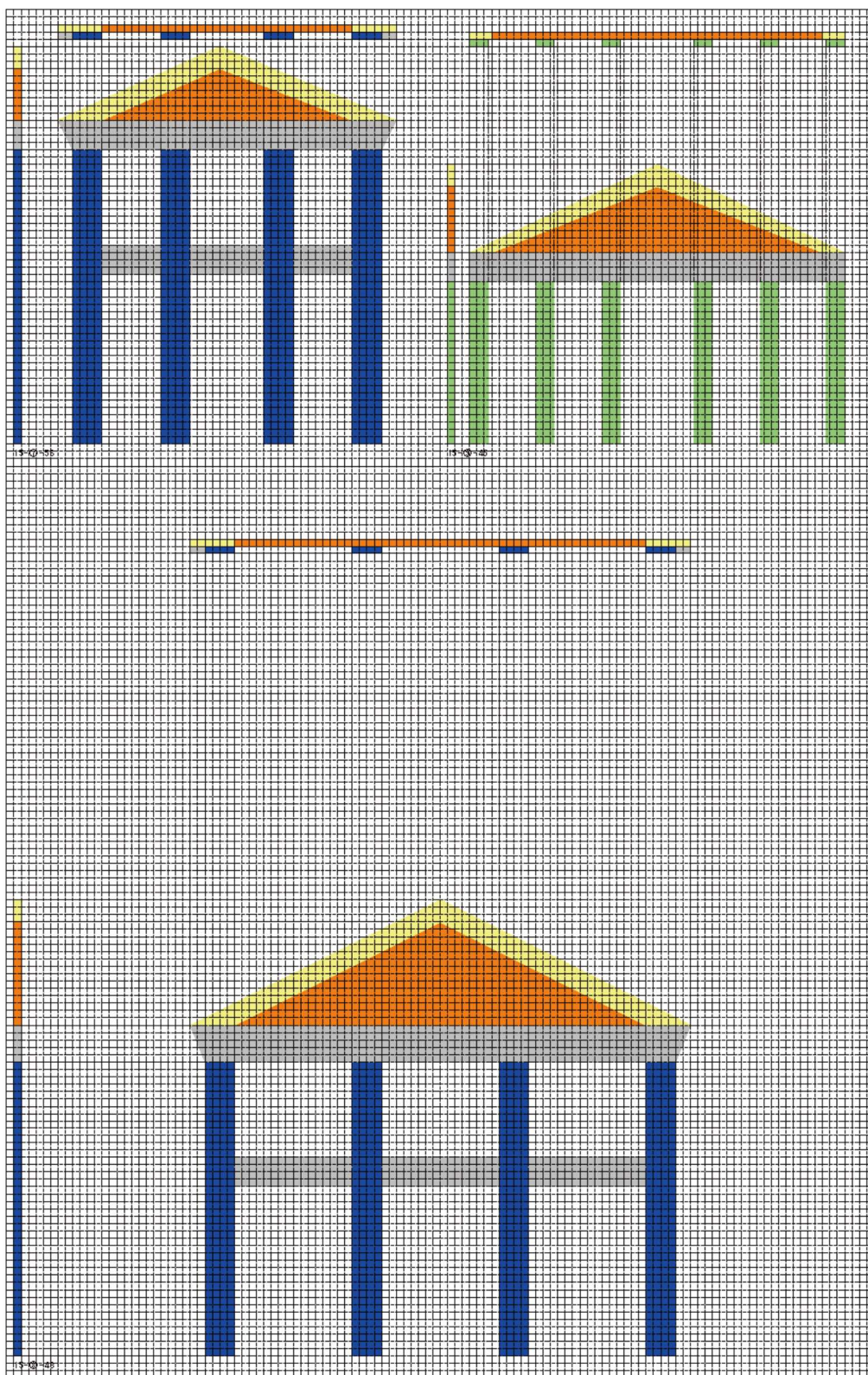
▲図3 14章⑦～⑨

15-①-45	15-②-53
15-③-48	15-④-63
15-⑤-58	15-⑥-57



▲图 4 15章①~⑥

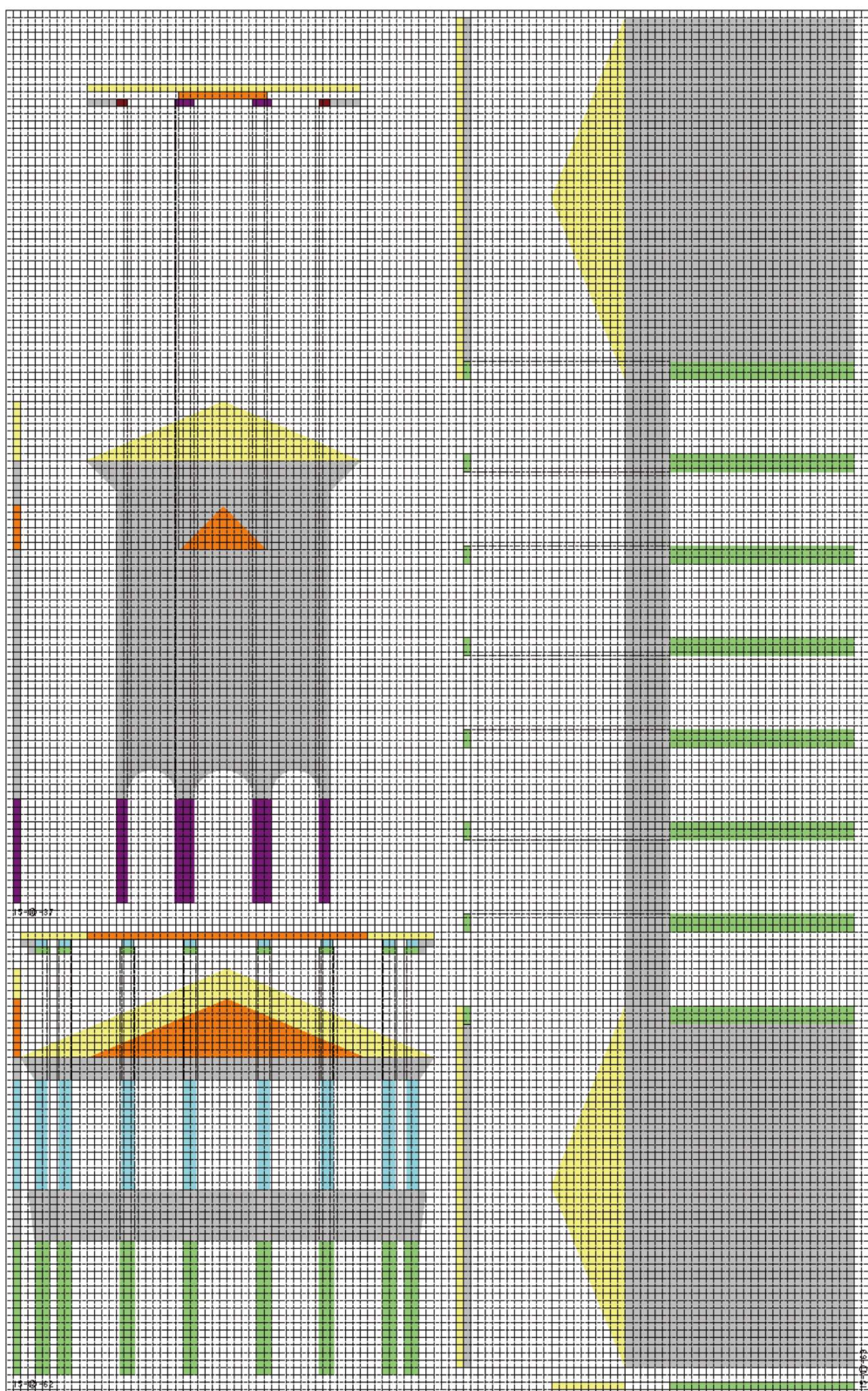
15-⑦-56	15-⑨-45
15-⑧-48	



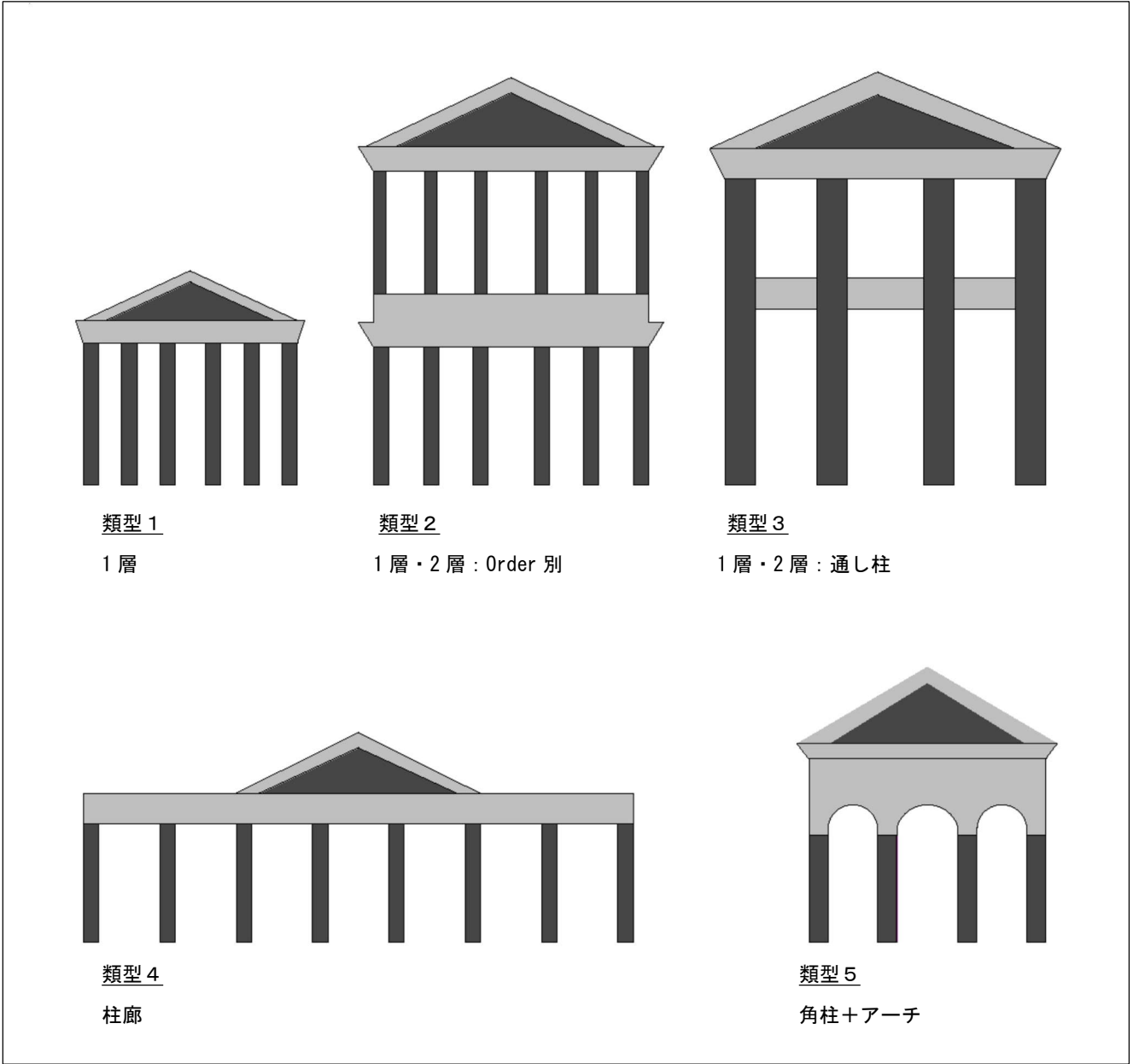
▲图 5 15 章⑦~⑨



15-⑩-37	15-⑪-69
15-⑫-62	



▲图 6 14 章⑩~⑫



▲図 7 類型 1 ~ 5

▼表 4. 類型 1~5 と 14 章・15 章の設計年代一覧

図面番号	図面名	設計年度	Order			Pediment		Pediment設置屋根		類型
			底辺：高さ	本数	種類	底辺：高さ	角度	底辺：高さ	角度	
14-①-41	ヴィッラ・ピサーニ	1541~1542	1：8.00	6	ドリス	4.57：1	23.62	3.77：1	27.89	1
14-②-56	ヴィッラ・パドエール	1556	1：10.00	6	イオニア	3.62：1	28.88	3.47：1	29.93	1
14-④-59	ヴィッラ・フォースカリ	1559~1560	1：9.25	6	イオニア	4.40：1	24.44	4.30：1	24.90	1
14-⑨-64	ヴィッラ・エーモ	1564	1：8.00	4	ドリス	3.71：1	28.30	3.55：1	29.35	1
14-⑥-52	ヴィッラ・ピサーニ	1552	1：7.78※1F	4	ドリス	4.00：1	26.56	4.00：1	26.56	2
			1：8.88※2F	4	イオニア					
14-⑦-53	ヴィッラ・コルナーロ	1553	1：9.00※1F	6	イオニア	4.28：2	25.01	4.22：1	25.34	2
			1：10.00※2F	6	コリント					
14-⑧-59	ヴィッラ・モチェニーゴ	1559~1562	1：9.25※1F	6	イオニア	4.66：1	23.19	4.70：1	23.02	2
			1：9.68※2F	6	コリント					
15-④-63	ヴィッラ・ヴァルマナーラ	1563~1564	1：9.00※1F	6	イオニア	5.00：1	21.80	4.80：1	22.62	2
			1：7.50※2F	6	コリント					
15-⑩-62	ヴィッラ・サレーゴ	1562	1：9.00※1F	8	イオニア	4.75：1	22.83	4.66：1	23.19	2
			1：7.50※2F	8	コリント					
15-②-53	ヴィッラ・ラゴーナ	1553~1555	1：10.00※通し柱	4	コンボジット	4.50：1	23.96	4.23：1	25.07	3
15-⑤-58	ヴィッラ・トリッシノ	1558~1562	1：10.00※通し柱	6	コリント	4.28：1	25.01	4.66：1	23.19	3
15-⑦-56	ヴィッラ・ティエーネ	1556	1：10.00※通し柱	4	コンボジット	4.57：1	23.62	4.40：1	24.44	3
15-⑧-48	ヴィッラ・アンガラーノ	1548	1：10.00※通し柱	4	コンボジット	4.00：1	26.56	4.00：1	26.56	3
14-⑤-57	ヴィッラ・ヴァールパロ	1557~1558	1：9.00	4	イオニア	4.87：1	22.30	4.90：1	22.20	4
15-⑥-57	ヴィッラ・レペータ	1557~1558	1：7.75	4	ドリス	4.33：1	24.77	4.00：1	26.56	4
15-⑨-45	ヴィッラ・ティエーネ	1545~1546	1：8.80	6	ドリス	4.72：1	22.71	4.25：1	25.20	4
15-⑪-69	ヴィッラ・サレーゴ	1569	1：10.00	8	イオニア	***：*	***	4.20：1	25.46	4
14-③-56	ヴィッラ・ツェーノ	1556	*：***	*	角柱	4.22：1	25.34	4.16：1	25.64	5
15-①-45	ヴィッラ・サラチェーノ	1545	*：***	*	角柱	4.33：1	24.77	4.25：1	25.20	5
15-③-48	ヴィッラ・ポヤーナ	1548~1549	*：***	*	角柱	5.00：1	21.80	5.00：1	21.80	5
15-⑩-37	ヴィッラ・ゴードイ	1537	*：***	*	角柱	***：*	***	4.75：1	23.96	5

▼表 5. 類型 1~5 と 14 章・15 章の設計年代の分布

14章	~1540	1541~1545	1546~1550	1551~1555	1556~1560	1561~1565	1566~	
類型1		1			2	1		4
類型2				2	1			3
類型3								0
類型4					1			1
類型5					1			1
	0	1	0	2	5	1	0	9
15章	~1540	1541~1545	1546~1550	1551~1555	1556~1560	1561~1565	1566~	
類型1								0
類型2						2		2
類型3			1	1	2			4
類型4		1			1		1	3
類型5	1	1	1					3
	1	2	2	1	3	2	1	12
14章・15章	~1540	1541~1545	1546~1550	1551~1555	1556~1560	1561~1565	1566~	
類型1		1			2	1		4
類型2				2	1	2		5
類型3			1	1	2			4
類型4		1			2		1	4
類型5	1	1	1		1			4
	1	3	2	3	8	3	1	21

### 4.3. Pediment の比率の比較分析

Pediment と屋根の比例分布を表 6, 表 7 に示す。14 章では 4:1 以下のものが若干見られるが、Pediment の比例は 4:1 から 5:1 の間に集中分布している。Palladio は屋根の比例について、いちばん理想的であるとしている比例を 4.5:1 としており、4:1 より急すぎないように、5:1 より平らすぎないように計画していることがわかる。

また屋根は Pediment より平均約 0.65° 角度が高い傾向にある。14 章では 15 章より平均約 1.5° Pediment の角度が高く、屋根は平均 2.5° 程度角度が高い傾向にある。

▼表 6. 類型 1~5 と屋根の比例分布

14章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
1:1層	1	2	1				4
2:1層・2層別			2	1			3
3:1層・2層通し柱							0
4:柱廊				1			1
5:角柱・アーチ			1				1
	1	2	4	2	0	0	9
15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
1:1層							0
2:1層・2層別				2			2
3:1層・2層通し柱			3	1			4
4:柱廊			3				3
5:角柱・アーチ			1	1	1		3
	0	0	7	4	1	0	12
14章・15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
1:1層	1	2	1				4
2:1層・2層別			2	3			5
3:1層・2層通し柱			3	1			4
4:柱廊			3	1			4
5:角柱・アーチ			2	1	1		4
	1	2	11	6	1	0	21

▼表 7. 類型 1~5 と Pediment の比例分布

14章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
類型1		2	1	1			4
類型2			2	1			3
類型3							0
類型4				1			1
類型5			1				1
	0	2	4	3	0	0	9
15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
類型1							0
類型2				1	1		2
類型3			2	2			4
類型4			1	1			2
類型5			1		1		2
	0	0	4	4	2	0	10
※15-㉔-37、15-㉕-69除外							
14章・15章	3.0:1~	3.5:1~	4.0:1~	4.5:1~	5.0:1~	5.5:1~	
類型1		2	1	1			4
類型2			2	2	1		5
類型3			2	2			4
類型4			1	2			3
類型5			2		1		3
	0	2	8	7	2	0	19
※15-㉔-37、15-㉕-69除外							

## 第五章 結論および考察

### 5. 結論および考察

## 5. 結論および考察

Order、Pediment とともに『建築四書』で Palladio が考える比例に沿った数値を用いて設計を行っていることがわかる。

Order は「パラディオオーダー」である、トスカナ式が 1 : 7、ドリス式が 1 : 7.5、イオニア式が 1 : 9、コリント式が 1 : 9.5、コンポジット式が 1 : 10、に近い比例関係を用いて設計されている。また、14 と 15 章を比較すると、14 章ではドリス式、イオニア式の Order のみが用いられている。15 章では、14 章では使用されていないコリント式、コンポジット式が用いられている。

屋根・Pediment においても、理想とする 4.5 : 1 を中心に、急すぎず、平らすぎない 4 : 1 ~ 5 : 1 の間で設計していることがわかる。また、14 章と 15 章を比較すると、14 章ではやや 4 : 1 寄りに、15 章では 5 : 1 寄りの比例傾向が見られる。

類型 1 ~ 5 からは、14 章では類型 1 と類型 2 の組み合わせが多く用いられており、15 章では類型 3、類型 4、類型 5 が多く用いられていて、設計の傾向に違いが見られる。

また 15 章では、ヴィチェンツァにおいて建築にたずさわるようになった 1530 年代から Villa の設計も行っているが、14 章の貴族での Villa では、Trissino との設計調査旅行を経てから、設計を行うようになっていることがわかる。

以上より、14 章の貴族の Villa と 15 章の紳士方の Villa では、Order と Pediment の組合せのヴァリエーションに違いが見られる。しかし、双方ともに Order と Pediment の関係性は比例関係にあり、寸法的な美しさが考慮されていると考えられる。

第 14 章「若干のヴェネチアの貴族方のヴィッラ 建築の図面について」	第 15 章「テルラフェーマ(内陸部のヴィチェンツァ)の 若干の紳士方のヴィッラ建築の図面について」
<u>Order</u> ドリス式、イオニア式 が多く用いられている。	<u>Order</u> コリント式、コンポジット式 が多く用いられている。
<u>類型 : Pediment・屋根</u> 4:1~5:1 に集中しているが やや 4:1 寄り	<u>類型 : Pediment・屋根</u> 4:1~5:1 に集中しているが やや 5:1 寄り
<u>類型 : 年代</u> 類型 1 : 1550 年代 類型 2 : 1550 年代  1550 年以降の設計が多い	<u>類型 : 年代</u> 類型 2 : 1560 年代 類型 3 : 1550 年代後半~1560 年代 類型 5 : 1540 年代  どの年代も同程度の設計数量

## 第六章 今後の課題

---

### 6. 今後の課題

## 6. 今後の課題

---

本研究では、Palladio の Villa 作品の、Order と Pediment 部分のみに着目し、図形化して得られた類型を用いることにより、その比例関係について分析することを試みた。その結果、作品の一定の傾向を導き出すことができたが、立面図の Order と Pediment に限定したことで、部分的かつ、二次元的な傾向のみの分析となった。奥行きを含めた 3 次元的な分析、平面図との分析をすることで、他の傾向も導き出すことができるのではないかと思われる。



## 脚注

---

- 註 1) 参考文献 12) P. 31  
註 2) 参考文献 12) P. 478  
註 3) 参考文献 12) P. 31  
註 4) 参考文献 12) P. 35  
註 5) 参考文献 2) P. 15  
註 6) 参考文献 2) P. 10～P. 14  
註 7) 参考文献 2) P. 69  
註 8) 参考文献 2) P. 69～P. 72  
註 9) 参考文献 12) P. 481  
註 10) 参考文献 2) P. 2～P. 9  
註 11) 参考文献 3) P. 175～P. 176  
註 12) 参考文献 3) P. 177～P. 180  
註 13) 参考文献 12) P. 58  
註 14) 参考文献 12) P. 482  
註 15) 桐敷真次郎(1926～2017)：東京都立大学名誉教授  
註 16) 参考文献 12) P. 32  
註 17) 参考文献 12) P. 191  
註 18) 参考文献 12) P. 189  
註 19) 参考文献 12) P. 58  
註 20) 参考文献 9)、参考文献 10)  
註 21) 参考文献 12) P. 506  
註 22) 参考文献 12) P. 192  
註 23) 参考文献 12) P. 120  
註 24) 参考文献 12) P. 141

## 参考文献

---

- 1) I Quattro Libri dell'Architettura di Andrea Palladio, Venetia, Domenico Franceschi, 1570;  
Reprint, Ulrico Hoepli, Milano, 1945,1969 ※ここでは参考文献11)を用いる。
- 2) ウィトルーウィウス建築書：森田慶一 訳注 東海大学出版部 2017年11月20日発行
- 3) ヒューマニズム建築の源流 ルドルフ・ウィットカウアー：著 中森義宗：訳 彰国社  
1971年1月1日発行
- 4) 桐敷真次郎『パラーディオの設計(1)-パラッツォ・ポールト・フェスタの場合-』日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)1990年10月 P975-976
- 5) 桐敷真次郎『パラーディオの設計(2)-カリター修道院の場合-』日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)1991年9月 P1145-1146
- 6) 桐敷真次郎『パラーディオの設計(3)-ロトンダの『四書』場合-』日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)1992年8月 P1209-1210
- 7) 桐敷真次郎『パラーディオの設計(4)-バジリカの場合-』日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)1993年9月 P1197-11987
- 8) 桐敷真次郎『パラーディオの設計(5)-ロトンダの実施建物の場合-』日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)1994年9月 P1245-1246
- 9) 桐敷真次郎『アンドレア・パラーディオのヴィチェンツァ尺について』日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)昭和58年9月 P2775-2776
- 10) 桐敷真次郎『ふたたびアンドレア・パラーディオのヴィチェンツァ尺について』日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)昭和59年10月 P2799-2800
- 11) パラーディオ「建築四書」注解：桐敷真次郎 訳注 中央公論美術出版 昭和61年1月20日発行
- 12) パラーディオの時代のヴェネツィア：渡辺真弓 中央公論美術出版 平成21年12月25日発行
- 13) アンドレア・パラディオの建築と図面解説：桐敷真次郎 本の友社 1998年5月25日発行

## 謝辞

---

本研究の作成に当たり、東京理科大学工学部建築学科坂牛研究室の指導教官であられる坂牛卓教授から終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導していただきましたことに深く感謝申し上げます。また、細部わたるアドバイスをして頂きました、大村さん、平田さん、そして研究室の皆様に感謝いたします。

2021年1月

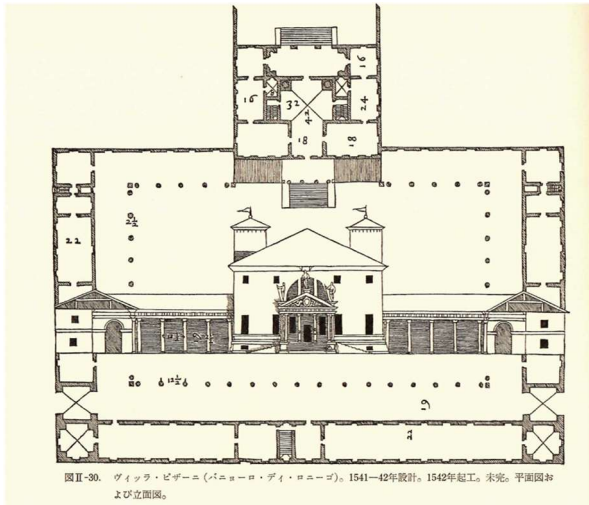


## 資料編

---

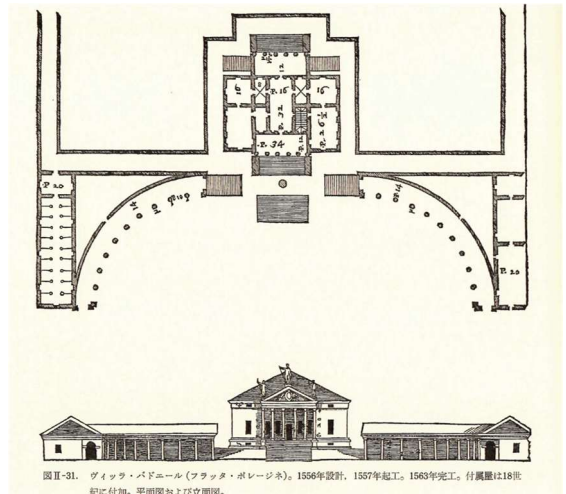
第二書・第14章「若干のヴェネチアの貴族方のヴィツラ建築の図面について」

14-①-41



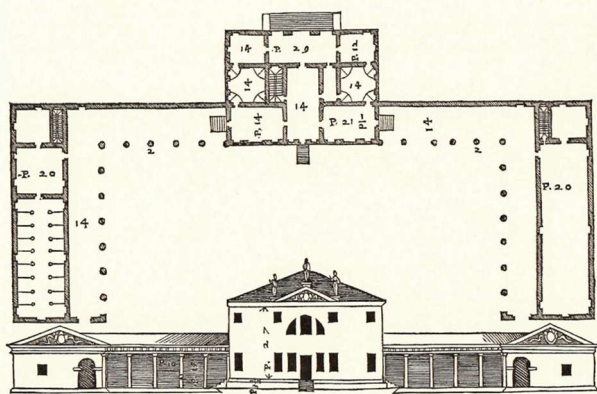
図II-30. ヴィツラ・ピザニ(パネーロ・ディ・ローゴ)。1541-42年設計。1542年起工。未完。平面図および立面図。

14-②-56



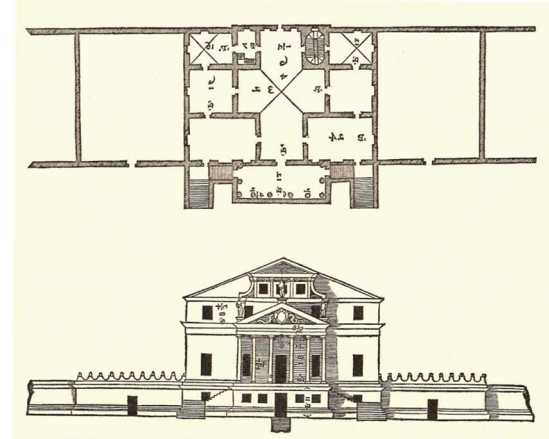
図II-31. ヴィツラ・バジエール(フラッタ・ボレージネ)。1556年設計。1557年起工。1563年完工。付属建は18世紀に付加。平面図および立面図。

14-③-56



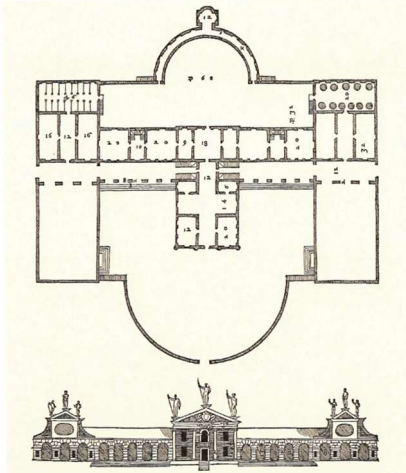
図II-32. ヴィツラ・ツェノーノ(ドネガール・ディ・チエッサーレ)。1556年頃設計。起工。平面図および立面図。

14-④-59



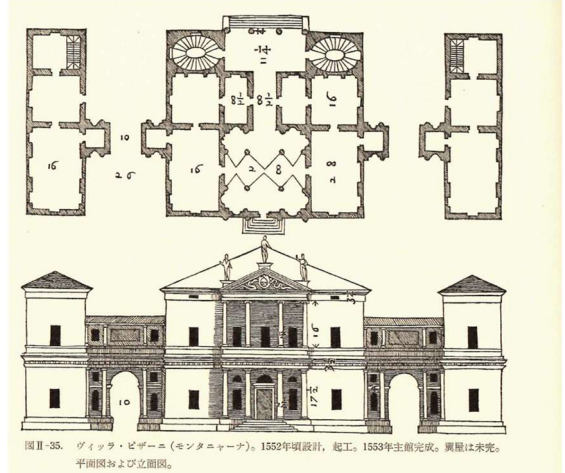
700-0221 (セー・ト・マ・ノ・セ・ス・ス・ス) ... 88-II 図  
。図面立寸は46図面平。工部。付属

14-⑤-57



図II-34. ヴィツラ・バルバロ(マゼール)。1557-58年設計。起工。平面図および立面図。

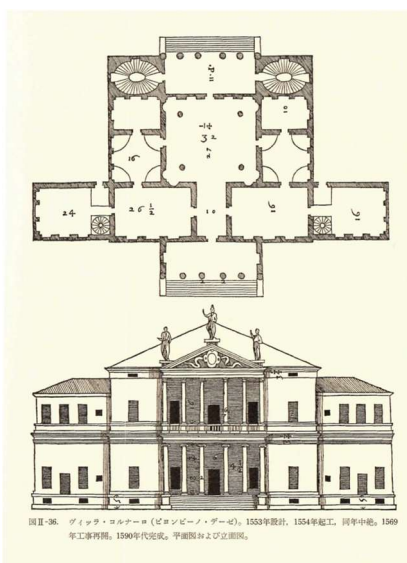
14-⑥-52



図II-35. ヴィツラ・ピザニ(モンタキャペロ)。1552年頃設計。起工。1553年主館完成。翼屋は未完。平面図および立面図。

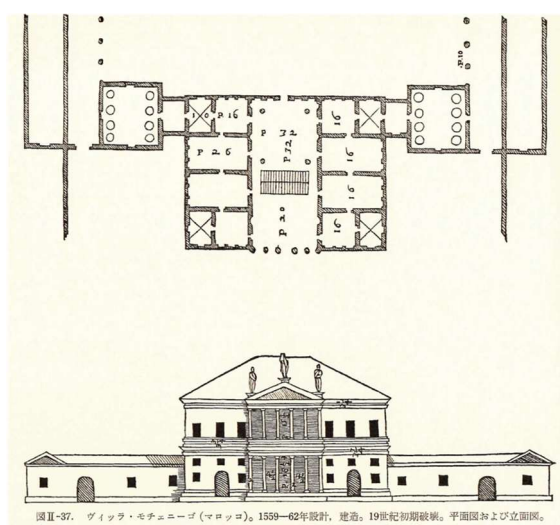
第二書・第14章「若干のヴェネチアの貴族方のヴィツラ建築の図面について」

14-⑦-53



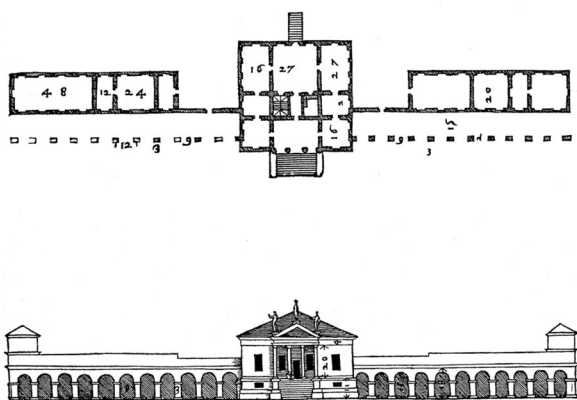
図Ⅱ-36. ヴィツラ・コロンナ(ビコンビーノ・ヴェーゼ)。1553年設計, 1554年起工。同年中絶, 1600年工事再開, 1590年代完成。平面図および立面図。

14-⑧-59



図Ⅱ-37. ヴィツラ・モチェニゴ(マロッコ)。1559-62年設計, 建造, 19世紀初期破壊。平面図および立面図。

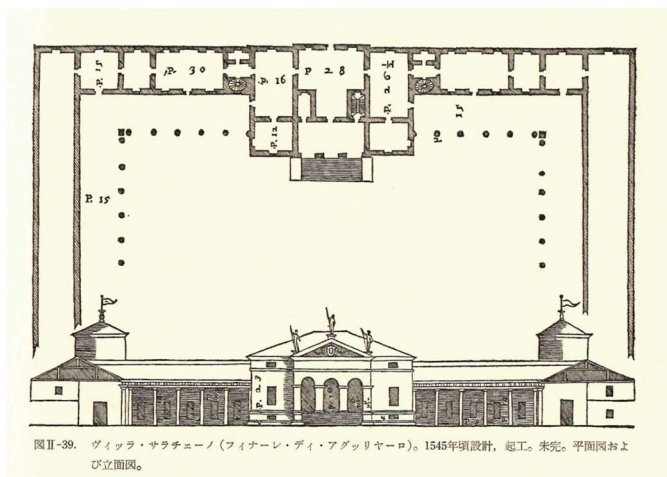
14-⑨-64



図Ⅱ-38. ヴィツラ・エーモ(ファンツォーロ)。1564年頃設計, 起工。1567年頃完成。平面図および立面図。

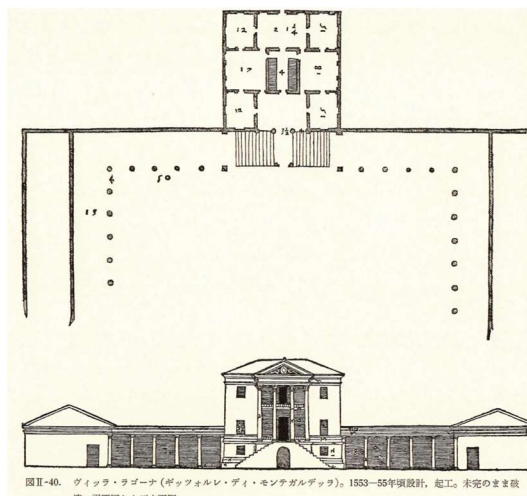
第二書・第15章「テルラフェーマの若干の紳士方のヴィツラ建築の図面について」

15-①-45



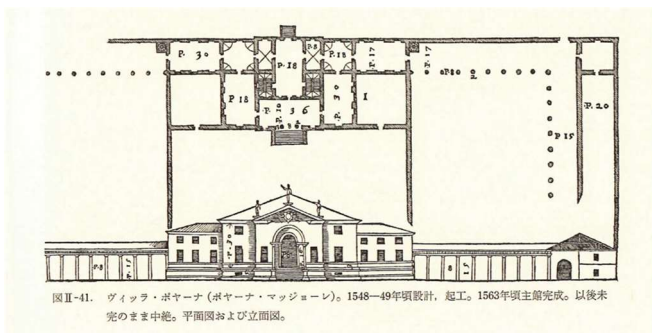
図II-39. ヴィツラ・サラチーネノ(フィナーレ・ディ・アディリヤーロ)。1545年頃設計, 起工。未完。平面図および立面図。

15-②-53



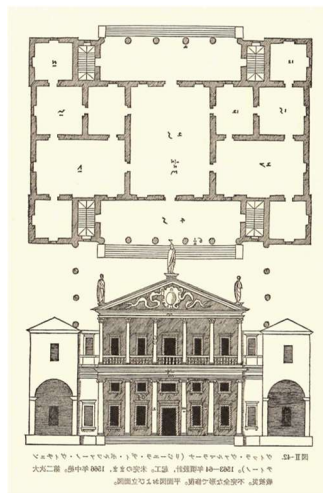
図II-40. ヴィツラ・ラゴナ(キャストリョーネレ・ディ・モンテカルヴット)。1553-55年頃設計, 起工。未完のまま残存。平面図および立面図。

15-③-48



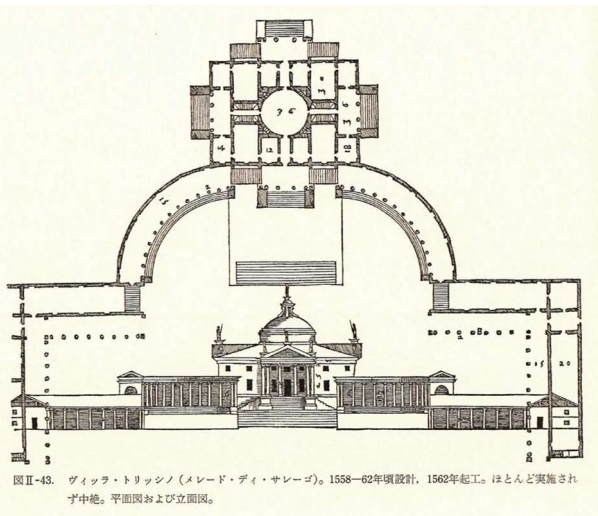
図II-41. ヴィツラ・ボニーナ(ボニーナ・マッジョーレ)。1548-49年頃設計, 起工。1563年頃主館完成。以後未完のまま中絶。平面図および立面図。

15-④-63



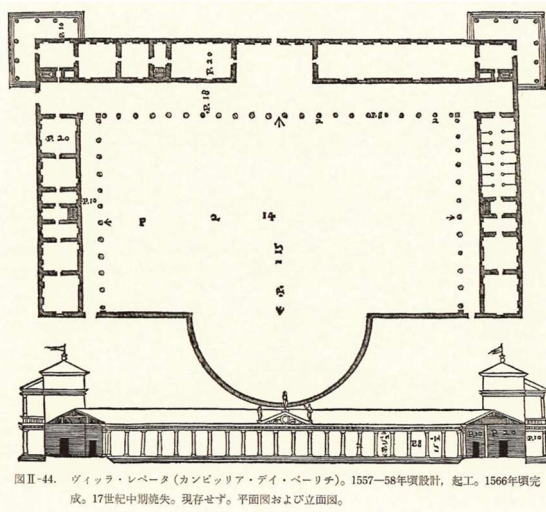
ヴィツラ・ペヴェータ(カンピッテリャ・ディ・ペヴェータ) 55-58年頃  
大凡二層。途中半壊。遺構。1557-58年頃設計。1557-58年頃起工。  
原設計者カステリョーネ・ペヴェータ。原設計者カステリョーネ・ペヴェータ。

15-⑤-58



図II-43. ヴィツラ・トリッシノ(メレード・ディ・サレーゴ)。1558-62年頃設計, 1562年起工。ほとんど実施されず中絶。平面図および立面図。

15-⑥-57

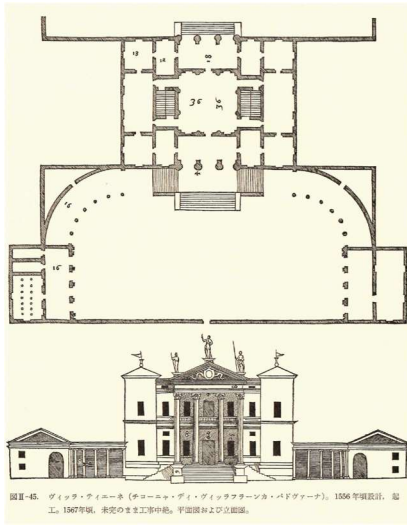


図II-44. ヴィツラ・ペヴェータ(カンピッテリャ・ディ・ペヴェータ)。1557-58年頃設計, 起工。1566年頃完成。17世紀中期焼失。現存せず。平面図および立面図。



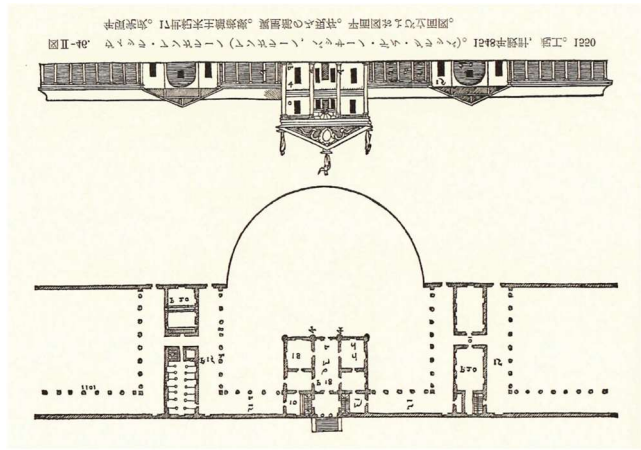
第二書・第15章「テルラフェーマの若干の紳士方のヴィツラ建築の図面について」

15-⑦-56



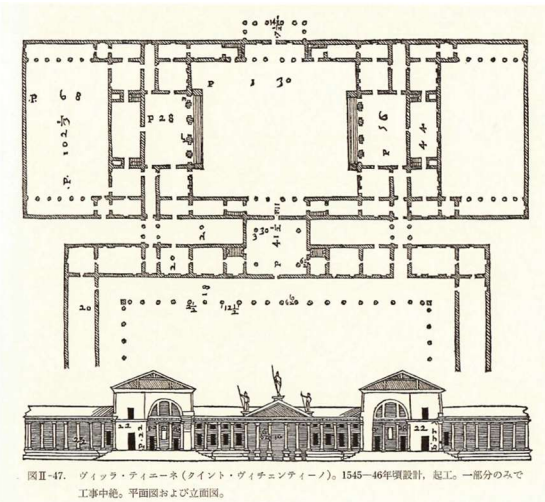
図Ⅱ-45. ヴィツラ・ヴィニョネ (ニコニコ・ディ・ヴィツラ・フランコ・パドヴァーナ)。1556年頃設計、起工。1567年頃、未完のまま工事中断。平面図および立面図。

15-⑧-48



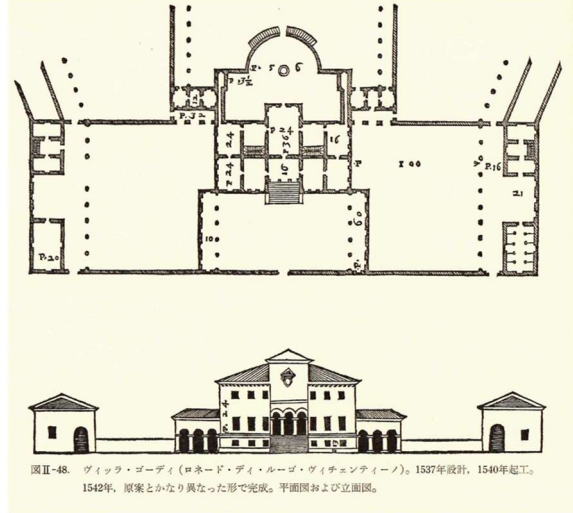
表前部等。13層石塔宇頂部等。諸層窓の寸法等。去開図および立面図。  
 図Ⅱ-46. ヴィツラ・ゴデー (ロネード・ディ・ルゴ・ヴィチェンティノー)。1298年設計、起工。1290

15-⑨-45



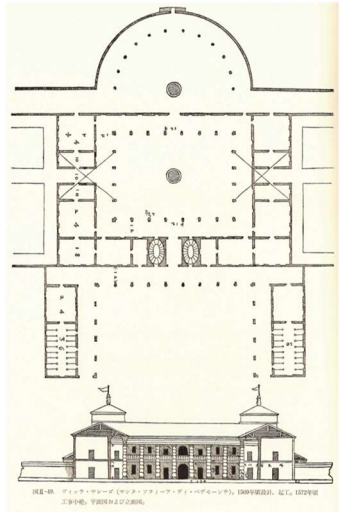
図Ⅱ-47. ヴィツラ・ヴィニョネ (タイント・ヴィチェンティノー)。1545-46年頃設計、起工。一部分のみで工事中絶。平面図および立面図。

15-⑩-37



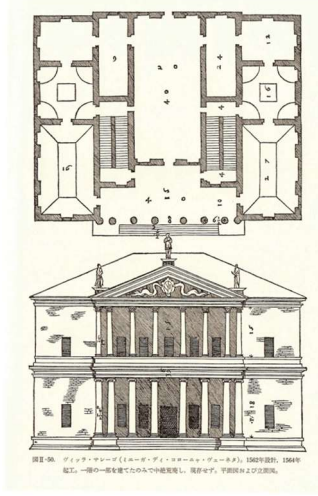
図Ⅱ-48. ヴィツラ・ゴデー (ロネード・ディ・ルゴ・ヴィチェンティノー)。1537年設計、1540年起工。1542年、原案とかなり異なった形で完成。平面図および立面図。

15-⑪-69



図Ⅱ-49. ヴィツラ・ヴィニョネ (ニコニコ・ディ・ヴィツラ・フランコ・パドヴァーナ)。1569年頃設計、起工。1570年頃、工事中絶。平面図および立面図。

15-⑫-62



図Ⅱ-50. ヴィツラ・サノーゾ (ニコニコ・ディ・ニコニコ・ヴェネチア)。1565年設計、1566年起工。一部の一部を建てたのみで中途絶し、残存せず。平面図および立面図。

